

丸山眞男と日本ファシズム論

—— 内なる「超国家」を求めて ——

福 家 崇 洋*

は じ め に

本論は、丸山眞男（1914-1996年）における日本ファシズム論の形成過程を追う。数多く存在する丸山研究において彼の日本ファシズム論はとりわけ注目されてきたテーマである。丸山が一躍その名を知られるきっかけとなった「超国家主義の論理と心理」、同論文を含む『現代政治の思想と行動』（未来社、1956.7年）は、先行研究の多くで引用・参照されてきた。これに対し、本論では、丸山自身がいかにして「ファシズム」時代を体験し、その体験を自ら対象化するなかで日本ファシズム論へ昇華させようとしたかを明らかにする。

戦前の丸山の軌跡については評伝があるほか、高等学校・東京帝国大学時代の学問・思想に関する研究なども積み重ねられてきた。¹⁾ しかし、従来の先行研究では丸山の学問形成に力点が置かれるため、時代状況との絡みは記述が手薄になる傾向があった。本論では、これまで筆者が取り組んできた日本ファシズム研究を参照しながら、丸山の時代体験と彼の学問・思想形成を検証する方法をとりたい。東京女子大学所蔵の丸山眞男文庫の資料保存・整理・公開・復刻作業を丸山眞男記念比較思想研究センターが担うことで、新たな文献の所在や歴史事実が明らかになってきた。本論では、これら貴重な諸資料を活用しながら、丸山が「ファシズム」の時代に何を見て何を論じたのかを明らかにし、彼の日本ファシズム論分析の一助としたい。

1 国家社会主義との対峙

1.1 「ナショナリズムとソシアリズムの結合」

丸山眞男の父幹治（1880-1955年）は新聞記者で、陸羯南が社主を務めた新聞『日本』で記者

* ふけ たかひろ 京都大学人文科学研究所

をした経験を持つ。父の人脈から、長谷川如是閑（雑誌『我等』で鋭い批評を担う）や、伯父で政教社員の井上亀六と接し、「左」「右」を含む思想・知識の影響を受けやすい環境に育った。そのため政治・思想的に早熟だった丸山青年は、満洲事変以後の1930年代にさまざまな知的応答を見せた。その青年時代をめぐって後年の丸山が「懺悔」をしていたことから本論を始めよう。

僕も正直なところ、これは懺悔みたいなものだけれど、高等学校一年か二年の時に寮の中でダベっていて、ナチが天下を取る前だけれど、ナショナリズムとソシアリズムの結合というのはいいじゃないの、と言ったのを覚えているんだ。（笑）よく分からなくてね。²⁾

この発言は、1985年7月に実施された「1930年代、法学部学生時代の学問的雰囲気」をめぐる談話の一節である。「ナショナリズムとソシアリズムの結合」とはなにか。当時の知識と丸山の真意を探るため、直前の発言もあわせて引用しておこう。「〔私有財産制と天皇制とをセットにする考え方に対しては、〕右翼の方のラディカルからは〔批判が〕あった。治安維持法第一条の第一項と第二項を分離しろという。国家社会主義、左翼からの転向者、林房雄とか赤松〔克麿〕とか、ああいう無産党からの転向者が国家社会主義ということを言い始めた。社会主義はいいじゃないか、と。皇室社会主義みたいなのは、北一輝なんかもそうなんだけれど、ずっとあるわけでしょ。」（〔 〕内は編集部による補足）³⁾ 丸山の第一高等学校文科乙類入学は1931年4月である。その年9月の満洲事変前後から無産政党や国家改造運動内で国家社会主義勢力が台頭した。丸山の回想はやや不正確で、国家社会主義は明治期に生まれ、大正期に再登場して、その流れが昭和初期の国家社会主義の興隆につながる。⁴⁾

丸山の高等学校時代の1,2年時は「国家社会主義」（高畠素之系統）や「国民社会主義」（赤松克麿系統）の文字が論壇などで目に付きやすかった時期である。早熟で多感な丸山青年が、それらの言説に感化されたことが考えられる。国家社会主義やナチズムは当時、日本共産党や無産政党など左派社会運動から「ファシズム」だと批判されていた。これは単なるレッテル貼りとして済ますことはできない。例えば、「国家社会主義」（高畠素之系統）は自らの思想に近いものとしてナチズムの紹介にいち早く努めていた。⁵⁾

丸山の「国家社会主義」への共鳴は、後年の彼の日本ファシズム論を考えるうえで興味深い点である。しかし、1988年4月から1994年1月にかけて実施された聴き取り（のちに松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』岩波書店、2006年、として刊行）にはこのテーマは登場せず、関係者・研究者の間で十分に深められないまま今日にいたった。

先行研究で描かれる丸山の高等学校時代は、第一高等学校での生活や唯物論研究会講演会参加にともなう「留置場体験」でほぼ占められる。その点でいえば、当局に弾圧された左翼青年

像が高校時代の丸山のイメージかもしれない。ただ、丸山は「ぼく個人は、二年のときでも、便所の落書きに「天皇制打倒」と書いてあると、生理的に不快な感じがしました」と語るので、⁶⁾「ナショナリズム」に対する共鳴はこの時も少なからずあったと思われる。

1.2 「国家社会主義」への共鳴と批判

次に、「ナショナリズムとソシアリズムの結合」への共鳴を裏付ける丸山の論説を検討したい。復刻されて東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集別集』第1巻（岩波書店、2014年）に収録された「一九三三年の所感五点」である。元は時代状況を記した無題の所感をまとめたものである。最初の、「一月下旬」の月日が記された所感には、丸山における、「国家社会主義」への共鳴と批判が共存している。⁷⁾丸山が同論で批判するのは軍部や「反動的国粋派」に対してである。とくに「自己過大視病患者」とも形容される「軍部」の「反資本主義的なそぶり」を警戒・批判した。これに対して複雑な評価が下されたのが「国家社会主義」に対してである。この思想と運動が日本社会で出てきた背景を以下のように紹介する。

国民は金融資本を背景とせる政党政治に全然信を失った。そしてたとえ確たる自覚はなくとも、兎に角現代の制度そのものに懐疑の眼を向けた。しかも資本主義を最も徹底的に究明せるマルキシズムの国家観は色々の意味で彼等に満足をあたえない。幼時から培われた尊王思想は強く根を張っている。そこで国家主義と社会主義（或は少くも反資本主義）とが暗々裡に結びつく。かくて漠然ながら国家社会主義的なものが最も国民の心をひくのは当然である。

「左翼」文献の知的洗礼や、同時代の「政党政治」不信論の影響などを感じさせる文章である。あわせて、政党政治やマルクス主義に代わる新思想として「国家社会主義」を捉え、共感したことが読み取れる。しかし実際、丸山が言うほど「国家社会主義的なものが最も国民の心をひく」いたかは疑問である。丸山による評価の背景として、丸山自身が「国家社会主義的なもの」に惹かれた「国民」のひとりだったことが、同論の次の記述から判明する。

ファシヨ団体は、元来の国粋主義より生れ出た盲目反動的ショーヴィニストと、従来の第二、又は第三インターナショナルを背景とせる無産政党より抜け出た国家社会主義団体とはその動機に於て本質的に異なるものがある筈だ。それで私は、最近迄、世界革命によって画一的にもたらされる国際社会主義は、それが現実からのまがう方なき飛躍であり空想である以上、結局切実なる大衆の要求に合致せずかえって階級的正義に反するとの見地からして国家社会主義に対して多大の同情を有していた。

「左翼」文献への懐疑と「国民」の動向が、丸山を「国家社会主義」に共鳴させた。満洲事変後に無産政党から抜け出た国家社会主義団体は主に2つある。社会民衆党からでた赤松克麿一派と、全国労農大衆党からでた国家社会主義勢力である。この思想と運動を1930年代にリードしたひとりが赤松克麿だった。赤松は東京帝国大学で吉野作造に師事し（のちに吉野の娘婿）、社会民衆党や日本労働総同盟の幹部となるが、1931年7月頃から次第に国民社会主義を唱えるようになる。赤松の言によれば、国民社会主義は「現実的インターナショナリズム」であり、その内容を具体的にいえば「劣弱なる諸民族が、共同戦線を張つて、強大民族の独占的權益の放棄のために闘争し、諸民族の生活水準の世界的平均化を促進する指導精神」となる。⁸⁾ この赤松の発想は西欧列強の植民地化に苦しむ東アジア地域を念頭においているため、「アジア・インターナショナル」とも評された（ただし朝鮮・台湾などに植民地独立の選択肢はない）。丸山はこうした国家社会主義勢力を「反動的国粹派」と区別してその意義を評価した。その評価のポイントは、思想の内容とあわせて、「大衆の要求に合致」する点にあったようだ。

しかしながら、ここから丸山の国家社会主義団体に対する評価は変化する。「しかし」のあとに、「国家の名を公然と冠する事は如何なる結果を招来したか。……国家の名に於て行わるる限り如何なる行動も是認せざるを得なくなつて来ているのではないか」と述べられた。とくに批判の対象となったのが赤松の日本国家社会党である。軍部と対にされた「自己過少視病患者」とは彼らのことを指すと思われる。

共産党から社会民衆党へ間あれ程長くインターナショナル、ソシアリズムの陣営でもまれて来た赤松氏が、ナショナルソシャリズムへと急^{マダ}施回をなすかなさぬに早くもそのナショナリズムのためにソシャリズムそれ自身をかなぐりすてて、純粹日本主義に屈伏しなければならなかった事は結局に於て一時非常なる可能性を暗示した国家主義と社会主義との結合は少くも現今の状勢に於てはいささかの蓋然性も持ち得ないという事を最も明白に暴露せるものでなくて何だろう。

丸山は、「国家主義と社会主義との結合」自体に「一時非常なる可能性」を認めたものの、現在の状況に適していないと判断した。そのうえで、丸山は「社会主義が、実現への徒らなる近道を夢みて、ナショナリズムと結合を敢てすれば、その後に来るものは、社会主義が国家主義に他愛もなく併呑されて行く悲惨な場面の展開に過ぎない」と述べた。では、若き丸山は理想の思想と現実の大衆、そして社会主義と国家主義の狭間でいかなる思想を思い描いたのだろうか。

2 ナショナリズムの表と裏

2.1 見え消し箇所から見えるもの

このテキストをもう少し詳細に検討してみたい。今まで引用してきた丸山眞男の「所感」は翻刻されて『丸山眞男集別集』第1巻（2014年）に収録されたものだった。この翻刻前の原文原稿「一高時代 1933年の手記 1月下旬」が、丸山眞男記念比較思想研究センターの丸山眞男草稿類デジタルアーカイブのサイトで確認できる。⁹⁾ 本論では、原文原稿で見え消しになった部分から丸山の思考の知られざる側面を検討したい。

1点目の見え消しは、「何故に軍部に対する国民の好意が相当永続的なのか」という問いに対する答えである。丸山は当初、「僕は之に対し唯一の答を持つそれは、軍部が国家社会主義的に見えるからだ。国家社会主義というとはジャーナリズムの所謂ファッショだ」と書いていた。ここからわかるのは、丸山が当初、軍部を「国家社会主義的」だと見ていたことである。丸山の「国家社会主義」評価を踏まえるならば、丸山が軍部にも評価しうる部分があると認めていたことになる。この軍部は国家改造を目指す青年将校を指すのか、「統制派」に至る勢力を指すのかはわからない。最終的に、軍部は「反資本主義的」だと修正され、軍部と国家社会主義は分別された。つまり、より社会主義を目指すか否かが丸山の評価の分かれ目になっていた。

とはいえ、これは丸山が「ナショナリズム」の方を名目的に尊重したことを意味しない。二点目の見え消し箇所には、「日本人にして真に日本を愛さぬものは居ない」という彼の文章が記されていたからである。この点とも関わるが、この原文原稿には、丸山のナショナリズムと関わる以下の部分が見え消しとなっている。やや長文になるが重要な箇所なのでそのまま引用しよう。

矛盾を根本に求めよ。日本に残された道はたゞ一つだ。敢然として資本主義制度を全廃し、
陛下の赤子をして飢えしむ 〔横に「めざる」と記載〕 る事なき社会主義日本の建設へ！

かくて後、国民はまことの祖国愛に目覚め、対外問題に対する純粹の挙国一致も生れ出るであらう。

これが成就には恐らく軍隊の力を要するであらう。軍部のたどる途はこれ以外には有り得ない。しかも現在の軍部はこの一本道に行きあたる事も出来ず、ひたすら谷底へ 〔横に「通じてゐる所の」と記載〕 つゞく道ならぬ道を猛進してゐる。大日本は一体従来の国家社会主義運動は、元来が満州事変を背景として、これまで思想界を支配してゐたインターナショナリズムに反撥して生じたものであるから、現今の非常時日本——就中対外的非常時の続く間はその国家主義を絶えず強調する手前、国論統一その反資本主義的態度を実行に移す暇なく従

つて国際的社会主義者から、大衆を偽瞞その外見的社会主義を以て偽瞞し、究極はブルジョワジーの最も完全なる防備をなしつゝあると罵倒される。そこに一般ファシズムの階級的良心が問題になるのだ。(□は判読不可箇所)

多くの解説が必要な文章である。以下3点に整理すれば、まず①「社会主義日本」の文句は、原文原稿の別の個所でも見出せる。これは、赤松らが国家社会主義のもとで無産政党や右翼団体が結集するために用いたスローガンのひとつだった。この文句を丸山は自身の主張として援用している。

②それとも関わるが、丸山は国家社会主義を評価し、それこそが国民のナショナリズムを喚起し対外的に「挙国一致」を導くとした。この描写からは、満洲事変以後の軍部の対外進出を批判する視点は乏しいといわざるをえない。むしろ対外進出のための「挙国一致」が唱えられ、水面下で進む軍部の総力戦体制の地ならしと結果的に結びつくものとなる。とはいえ、最終的には見え消しにされたので、丸山が最後までそう意図したわけではない。

③次に、この箇所から軍部や国家社会主義に対する丸山の姿勢をより詳しく読み取ることができる。この原稿で丸山は軍部を批判していたが、それは侵略批判や平和主義の観点からではない。むしろ、当初軍部を「国家社会主義的」とみたように、評価しうる部分を認めていた。丸山にとって問題なのは、自らが望む方向に現実の軍部が向かわない点にあった。

この姿勢は、赤松らの国家社会主義勢力に対しても同様である。彼らは「国家主義」を強調するあまり「社会主義」の部分が疎かになっている、この部分をもっとしっかりして「インターナショナリズム」へ向かわねばならぬというのが丸山の論調だった。「インターナショナリズム」と「ナショナリズム」をいかに調整するのか気になるが、もともと赤松克麿は国家社会主義を過程として国際社会主義へ向かうなどと述べていたので、それを丸山が真に受けた可能性が高い。つまり、丸山は赤松らの思想と主張をそのまま受け取り、その理念通りに実行できていない（むしろ「反動的国粋派」国家主義の方へ傾斜する）姿勢を批判した。だからこそ、「一般ファシズムの階級的良心が問題になる」のである。以上を考えるならば、この時期の丸山は「国家社会主義」をより理念化してとらえ、その地点から現実の国家社会主義勢力や軍部を批判するという姿勢をとっていた。

2.2 留置場体験と「懐疑のつぼ」

この点をふまえたうえで、先行研究でしばしば言及される、丸山青年の唯物論研究会への参加（1933年4月）とその後の「留置場体験」をどうとらえるかを考えてみたい。まず言えることは、当時の丸山は唯物論研究会と思想的な距離が大きかったということである。丸山自身も「唯物論ということは全く関係なく、関係なくと言いつぎだけれど、とにかく如是閑〔長谷川

如是閑が講師だった——引用者〕という名前にひかれて行ったのが運の尽きだった」と述べる。¹⁰⁾ 実際、同会の機関誌を丸山が購読するようになるのは1934年以降である。¹¹⁾

ただし、この「留置場体験」は丸山の人生において大きな意味を持った。ほぼ同時期の所感原稿には「私の過去十数年の生涯中曾てなかった、又これから先の私の生活中にも恐らくあるまいと思われる程の激動を私の心に起した出来事」とある。¹²⁾ この「激動」の内容を想像するならば、日々の日常と切り離された、国家権力の裏側を思わぬ形で体験したということだろう。

警察署に連行される丸山は表向きは平静を心がけつつも、心のなかで「警察なんて真平御免だ。警察なんて犯人「養成」場じゃないか。そこには奸智に満ちた「取調」、目をそむける様な「拷問」、それから肺を食う「箱」が貪婪な眼で獲物を待っている」という言葉を意識した。この処遇は、丸山をして「限りない焦燥の沼」に足を踏み入れさせるものだった。この原文原稿では、他に「書斎の空想だ！ 言葉の綾だ！」などの言葉も綴られたので、自身の言葉や思考の楽観性を丸山は身をもって意識したのだと思われる。その意味で、「留置場体験」はシラミとの戦い、拷問される朝鮮人の姿など普段の生活とはかけ離れた陰惨な世界を丸山に垣間見せるとともに、たまたまノーマルな世界で生きてきた自身の軌跡と思考を自覚させることになった。

先の「国家社会主義」への共鳴も、青年期特有の楽観的かつ勇ましい言説であったことを考えれば、丸山の「留置場体験」は「ナショナリズム」が掲揚する「国家」とは実際いかなるものなのかを理解するきっかけになったのではなからうか。この「国家」とは高圧的な警察権力だけでなく、その権力の源である帝国日本の「国体」と関係する。回想になるが、丸山は取り調べで所有する手帳を調べられたときにこの「国体」への態度について訊問されたという。

私にとってもっとも意外であり、また心外に思われたことは、特高が「貴様は君主制を否認しているな」と言ったことであった（附言するが天皇制という用語は共産党は別として当時一般には用いられていなかった）。特高は手帖の中に私が書きこんだ数行を指してそう言ったのである。その数行にはドストエフスキーが「作家の日記」のなかで「私の信仰は懷疑（附注一神の存在にたいする懷疑を指す）のるづぼの中で鍛えられた」といっているのを引用しながら、「果して日本の国体は懷疑のるづぼの中で鍛えられているか」と書いてあった。私はすぐさま「それは何も日本の天皇を否認する……」といいかけたら、言葉の終るのを待たずに特高は「この野郎、弁解する気か」といいざま、私にビンタを喰わせた。¹³⁾

「作家の日記」云々とあるが、正確には、『ドストエフスキー全集』第12巻（カラマゾフ家の兄弟、1926年、ドストエフスキー全集刊行会）の「ホザンナといふものは疑惑の坩堝とか云ふやうなものの試練を経なければならないのです」の一文を指すのではないかと思われる。「ホザ

ンナ」とは「神を頌する辞」のことである。¹⁴⁾「陛下の赤子」を飢えしむるなかれなど書いていた当時の丸山にとって「国体」否認はまったくのいいがかりでしかなかった。しかしこの体験は、そうした丸山でさえ当局から睨まれれば「国体」反逆者の烙印を押されてしまうことの恐怖を、心身に植えつけることとなった。

3 国家と個人の狭間で

3.1 「政治学に於ける国家の概念」の検討

丸山眞男の「留置場体験」(1933年4月)は、今日から見て、その時期に意味があったのではないかと考える。同年5月から五・一五事件の公判が日刊新聞などで大々的に報じられ、海軍青年将校や陸軍士官候補生の主張が多数のびとの同情を呼ぶことで、大規模な減刑嘆願運動につながるからである。

丸山は五・一五事件を新聞などで知ったと思われるが、さほど批判的ではなかった。回想で「高等学校二年〔1932年〕の五・一五事件のときは、犬養首相が暗殺されたのですけれども、ぼくが知るかぎり、軍人に対し非常にサポートが多かったのです。新聞を含めてそうでした。一般の空気がかなり同情的というか」と語る。¹⁵⁾自身の感想は述べていないが、財閥や資本主義を批判する海軍青年将校らは、丸山が1933年の所感で期待していた「軍部」像に近かったはずである。しかし、「留置場体験」で権力と暴力の怖さを体験した丸山が海軍青年将校らに感情移入できたかは疑問の余地がある。釈放され日々の日常に戻っても、前歴者の丸山は学校当局から監察すべき対象となっていた。

丸山は1934年から東京帝国大学法学部政治学科に入学するが、ここから「左傾化」した。その要因は、大学入学後、「左翼」文献をよく読んだことである。唯物論研究会機関誌や『日本資本主義発達史講座』以外に、読書会で仲間たちとローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』、ヒルファーディング『金融資本論』、マルクス『資本論』などを読んだという。それらの影響は、岡義武に提出した課題レポート「明治政府の秩禄処分とその影響——武士階級の階級分化過程に関する一考察」(1935年1月)や、緑会懸賞論文の「政治学に於ける国家の概念」(1936年12月)でも確認できる。本論では、ファシズムに対して初めて学究的な検討を加えた後者の論文に着目しよう。

「政治学に於ける国家の概念」の研究手法・枠組ではK・マンハイム『イデオロギーとユートピア』やG・ザロモン(マンハイムのもとで助手経験あり、1933年にナチス台頭で亡命)『Allgemeine Staatslehre』への、歴史認識・価値判断ではヒルファーディング(ドイツ社会民主党員だが、1933年にナチス台頭で亡命)『金融資本論』への依拠が見られる。前者では、丸山の日本思想史分析の手法となる「思惟様式」論の萌芽が見られる。後者に対しては、レーニンの帝

国主義論などヒルファーディングに対する多くの批判が出ていたにもかかわらず、あえて依拠した点が興味深い。丸山とナチズムとの遠さ、そして非共産主義的社會主義との近さを感じさせる選択である。

「政治学に於ける国家の概念」では、「個人主義」「ファシズム」の各国家観と前者から後者へいかに移行したかが述べられた。¹⁶⁾ 個人主義的国家観とは、「あらゆる社会的拘束から脱却した自由平等な個人 —— それは当然に抽象的存在であって肉体性を欠いている —— を最後の實在と看做し、一切の社会關係をばその個人の相互關係から説明し、その相互作用の円滑を確保する唯一の保證を国家主權に求める如き国家理論を総稱」したものである。「市民社会の發展の特異性」によって各国で位相が生じ、個人重視の社会がイギリス、国家主權重視の社会がドイツになる。しかし、世界資本主義が「金融資本」の段階に入ると、自由競争から独占への転化や社会運動の發展が生じた。さらに独占資本の段階＝帝國主義時代に入ると、市民と国家權力の關係が密接となり、その關係が社会運動の隆盛で促進されることで「権力国家」の要望が醸成されることを、ヒルファーディングの文献を引用しながら丸山は論じている。

こうした状況が第一次世界大戰後の世界でも起きているとして、「市民社会の存続を犠牲として民主化を押進めるか、民主化の地盤である立憲機構を破壊して市民社会を救い出すかのジレンマ」が生じていること、イタリア、ドイツでもこの岐路にあたり後者の道を選ぶことで「ファシズム独裁」が成立したとする。ここに現れた「ファシズム国家観」を、丸山は以下のように説明する。「ファシズム国家観の出発点は常に民族乃至は国民である。」「かくして民族共同体の有機的結合とか、その倫理的統合という様な美わしい概念から出発したファシズム国家観はここに遂に、「敵対する諸力」を撲滅し、「妨害的勢力」を弾圧する強力な国家權力の肯定に到達した。」この国家観がファッショ・イタリア、ナチス・ドイツの思想家たちの言説を例示しながら語られた。丸山の指摘で興味深いのは、人間の精神にまで視野を広げながら「ファシズム国家観」が生まれてくる背景を考察しようとした点である。

こうした動乱期〔第一次大戰後〕には諸文化体系の自律性が失われ、その総合的な究極的な基礎が、何か根源的な神秘的な存在、若しくはたくましい生命力といった様なもののなかに求められる。そうしたものは結局抽象的であり、具体的には歴史的な形象と結びついてのみ存在しうるにも拘らず、人々はその根源的なもののなかに捉われぬ自己を見出そうとする。そうして外的な形象に対する蔑視は自己と形象との結びつきを實に安易輕直ならしめる。こうした態度から生れるものは行動の極度の浮動性であり無原理性である。

この文章から想起させられるのは、かつて警察の取り調べで問題視された、「果して日本の国体は懷疑のるつぼの中で鍛えられているか」という丸山の手帳の一文である。ここでは、信

仰の対象への懷疑を越えて、信仰を自己内で生み出しつづける思考の背後を問い直そうとした点で以前より思考の深まりを見せている。では、丸山にとって望ましい「自己」の姿とはいかなるものなのか。

3.2 「自由主義」の評価をめぐる

「政治学に於ける国家の概念」で気になるのは、「個人主義」「ファシズム」の各国家観が地続きであることが丸山によって指摘されることである。「ファシズムは中間層の運動として出発しながら結局は独占資本の極度に合理化された寡頭支配形態に落着く」という歴史的な宿命を担っている。だから一方の極に絶対的な国家主権、他方の極に一律に均らされた国民大衆というのがその真実の様相であって、畢竟それは市民社会の本来の傾向の究極にまで発展したものにほかならない」という一文がその例である。「市民社会」とは、資本主義下のブルジョアジー社会だと思われる。他にも、「はしがき」の注には以下の説明が登場する。

例えばファシズムのイデオログたちは自由主義・民主主義を排撃するときに屢々その上に「ブルジョワ的」という形容詞を冠する。しかし今日は市民階級自体がもはや自由主義の担い手たることをやめて「全体主義」の陣営に赴いている時代である。

この論文では、「ファシズム」と「全体主義」はほぼ同義で用いられるが、丸山の問題意識としては、この時代状況をいかにして脱することができるのかが重要だったと思われる。「左翼」経済学者（ヒルファーディング）への依拠からは、この論文に書かれていない、「無産者」を主な基盤とする〈社会主義〉的国家観を丸山は想定したうえで「個人主義」「ファシズム」各国家観の連続性を指摘していた可能性がある。後年の丸山が明らかにしたこの論文の意図のひとつとして、同時代の「人民戦線」への意識があったという。

丸山 まあ、そうですね。そういうこと〔自由主義を「イデーとして自律的な価値を肯定」すること〕と、それからもっと政治的な動機として、やっぱり人民戦線というものがあったんですよ。一九三〇年代の。それで磯田君に僕は国家論の人民戦線を——生意気だからね、学生だから——書くつもりだったと言ったんです。つまり自由主義的な、美濃部〔達吉〕さんなんかやつつけられたでしょ、天皇機関説問題は一年の時に起こったから、自由主義はひっくり返ってしまった時代ですよ。だから自由主義と社会主義、まあ、コミニズムっていうのはちょっとね、これはまた別の話になるけれど、これはあまり念頭にないですよ。今日言う共産党というようなものは存在しないね。だけど自由主義と社会主義との共同戦線を張ってファシズムに対抗するという人民戦線の発想を国家論でやろ

うとした。¹⁷⁾

丸山はここで「反ファシズム」の立場から「自由主義と社会主義との共同戦線を張って」と回想するが、この論文では、市民社会とファシズムの連続性を指摘することで自由主義に対する厳しい評価を下しているように読める。むしろ、「 Kommunismus」でも「自由主義」でもない道を模索していたのではないか。現実には、非合法下で大衆との接点を失った共産主義者は弾圧下で「転向」したため、ヨーロッパのように、共産党がこの時代で依拠すべき選択肢にはなりえない。実際、論文の「むすび」で、丸山は、「弁証法的な全体主義」という独自の言葉を提起することで、その解決の道を示す。その具体的な内容は以下の通りである。

我々の求めるものは個人か国家かの Entweder-Oder の上に立つ個人主義的国家観でもなければ、個人が等族のなかに埋没してしまう中世的団体主義でもなく、況や両者の奇怪な折衷たるファシズム国家観ではありえない。個人は国家を媒介としてのみ具体的定立をえつつ、しかも絶えず国家に対して否定的独立を保持するとき関係に立たねばならぬ。しかもそうした関係は市民社会の制約を受けている国家構造からは到底生じえないのである。そこに弁証法的な全体主義を今日の全体主義から区別する必要が生じてくる。¹⁸⁾

この文章をみるならば、明示化されない〈社会主義〉のもとに自由主義、ファシズム双方を弁証法的に乗り越えることを意図していたように読める。ただ、丸山は「社会」よりももっと「個人」のあり方に力点を置いていた。それが「絶えず国家に対して否定的独立を保持する」個人になる。国家からの解放を求める自己の精神がときに「神秘的な存在」に意図せず回収されていくことに対して、国家・個人の間での緊張感を「絶えず」持ち続ける精神のありようこそがこの時点で丸山が導き出した回答であった。

4 丸山眞男における思想的転回

4.1 三木清と「否定的独立」の背景

「政治学に於ける国家の概念」で丸山が強調した、「弁証法的な全体主義」についてもう少し考えてみよう。先の引用において、「媒介」「否定的」というやや政治学では聞きなれない言葉が含まれていた。後年の丸山の回想によると、これは三木清の主張に依拠していたという。三木は京都帝国大学で西田幾多郎に師事した、当時新進の哲学者、マルキストだった。

それではどうして弁証法的全体主義を今日の全体主義から区別しなければいけないかと

いうと、それには三木清の「有機体論と弁証法」という論文があるんです。僕〔丸山を指す——引用者〕はこれに非常に感激したわけです。有機体の論理と弁証法の論理がいか
に違うか、と。ナチなんかではみんなそれを一緒にして、カール・ラーレンツなんかの
ヘーゲリアンは大体弁証法を使っている。個人主義的なものの考え方を弁証法で批判して
いる。そういう状況の時に、三木清は実に見事に有機体の論理——有機体の論理も全体
主義だし、弁証法の論理も全体主義だけれども、違うんだという——を書いているわけ
ですね。それを論文を書く直前に読んだものですから、あまり考えていない。ただ個人が
国家に対して否定的な関係に立ちながら、国家は個人を否定的媒介として国家共同体とい
うものは成立するんだという、これが弁証法的国家論なんだ、と。¹⁹⁾

丸山があげる三木の論考「有機体説と弁証法」を読むと、有機体説を多分に含むヘーゲルの
観念弁証法とマルクスの唯物弁証法が対置され、後者が評価された。しかも三木は、「資本主
義社会の崩壊期たる現代にあつて、かかる全面的なる批判をなすものは、現代に於ける批判的
階級たる、実践的なプロレタリアートである。この階級の批判の武器たるマルクス主義は弁
証法的唯物論を中心思想とする」と述べている。²⁰⁾ この点から言えば、三木のマルクス主義や
階級への明確な依拠と、丸山のいう「国家共同体」の成立がいかにして結びつくのが曖昧であ
る。

そこで、「政治学に於ける国家の概念」に関する丸山の別の回想があるので、少し長いが引
用しておこう。

僕の学生論文〔1936年の東大法学部緑会雑誌懸賞当選論文「政治学に於ける国家の概
念」〕における「否定的独立」〔「個人は国家を媒介としてのみ具体的定立をえつつ、しか
も絶えず国家に対して否定的独立を保持するとき関係に立たねばならぬ」〕は、この自
由主義〔「国家からの自由」においてとらえられた「自由主義」を指す——引用者〕と直
接には関係しない——〔後略——引用者〕。というのも、そこでの「否定」とは弁証法
における「否定」のことであって、僕がその後、南原先生を知ることによって立つに至っ
た意味での「否定」〔全体・国家を相対すること〕ではない。このように「否定的独立」
には、自由主義の原理はまだ入っていないのだ。

南原先生を通じて僕が学んだのは、国家をも超越した絶対的価値に立ったところの否定
的独立であるが、学生論文での「否定的独立」はそれとはちがうのであって、これの背景
にあったのは、三木清の「弁証法的全体主義」の語であり、これを僕は使った。この立場
はヘーゲルもとったが、しかしきわめて危ないものだ。なぜならそれは——三木やヘー
ゲルの意図は別だっただろうが——田辺元の「絶対弁証法」に至る論理を内在させてい

るからだ。すなわちそこからは、〔〈国家と個人の弁証法的統一〉をめざすゆえに〕国家を超える価値が出てこず、国家の神格化が起こる。²¹⁾

これは「自由主義」の内容について、先の丸山の回想と齟齬がある。先の丸山の回想では、国家からの自由という意味が読み込まれた自由主義と社会主義との「人民戦線」の可能性が語られていた。しかし、今回の回想では、そもそも自由主義の内実が異なるとされた。

これとは別に、この回想が興味深いのは、「三木清の「弁証法的全体主義」の語」に依拠したと丸山が述べた点である。三木の論考「有機体説と弁証法」には、この言葉は登場しない。本論では、丸山が依拠した可能性がある三木の原稿として、「全体主義批判」（神戸商大新聞部編『経済科学 四十四権威集 附・世界の学者を語る』甲文堂書店、1935年）をあげてみたい。ここにも「弁証法的全体主義」が登場するわけではないが、「否定的独立」の文字は、この原稿の影響を受けたものではないかと考えられる。三木は同論で、「全体主義」を鋭く批判しながら、以下のように個人と国家の「弁証法」的關係を説いていた。

個人は国家を媒介としてのみ自己を実現し得ると云ふとすれば、そのことによつて国家の重要性は或る仕方で強調されるにしても、目的であるのは個人であつて国家ではなからう。国家が目的であるならば、国家は個人を媒介とするといふ風に云はれなければならぬ。しかもこの場合には媒介となる個人の国家に対する否定的独立的意義が認められねばならぬ。また国家の統制の強化が個人の實力を弱める結果になれば、其ことは国家の實力を弱める事にもなるのである。個人の強大を要求することが凡て個人主義にほかならぬかの如く考へることはできない。そして媒介といふものは哲学的には否定の意味を除いては考へられぬ。媒介は否定の媒介である。全体主義者が世界的普遍的なものも国家の媒介なしには実現され得ないと論ずるとき、彼等は国家において世界歴史の発展における否定の契機を見てゐるのであらうか。²²⁾

丸山は、三木のこの「国家」と「個人」の關係をめぐる叙述に共鳴し、自身の言葉で「弁証法的な全体主義」を提起したのではないか。「媒介となる個人の国家に対する否定的独立的意義が認められねばならぬ」という三木の一文は、「国家」の存在をどこかで背負いつづける丸山「個人」を鼓舞するものであったかもしれない。

他方で、丸山と三木の異なる点は、「世界」に対する意識の強度である。三木は「世界」へ向かううえで国家の否定的媒介を視野に入れたが、丸山の原稿には「世界」に対する認識は記されていない。若さといえばそれまでだが、後年の丸山自身が危惧したごとく、当時の丸山の主張では「国家を超える価値が出てこず、国家の神格化が起こる」危険性があった。それを克

服する道こそ、「国家をも超越した絶対的価値に立ったところの否定的独立」(丸山)だが、この時点の丸山は現実に関心を有するがゆえに、国家と個人の狭間で模索しつづけていた。

4.2 反ファシズム統一戦線論

「政治学に於ける国家の概念」のファシズム論は、日本を対象として論じたものではなかった。しかし、約半年前には、日本に激震を与えた二・二六事件が起きていた。政軍界の要人を暗殺したこの陸軍青年将校らのクーデター事件について、丸山は兄(NHK勤務)と「大激論」を交わしたという。「兄貴は「あれは根本的には進歩的だよ」と言う。ぼくは「いや違う。いかなるファシズムも初期においては急進的だ。反資本主義的なことは、どんなファシズムも初期の段階では言うのだ」というので大激論をした」。兄が「進歩的」だと評価したのは、事件直後に青年将校に期待する「民衆の反応」を実見したためだった。²³⁾

では、丸山が所感で軍部よりも期待をかけていた「国家社会主義」の方はどうか。1936年頃、赤松らの日本国家社会党は党内対立での勢力減退や日本主義へのさらなる接近で、丸山が求める方向とは大きく異なっていた。むしろ、彼らと同じルーツを持つ社会大衆党の方が丸山の関心領域に入ってきたと考えられる。社会大衆党は、国家社会主義勢力が抜けた社会民衆党、全国労農大衆党が合同して1932年に結成された。²⁴⁾当初、同党は国家社会主義勢力を批判したものの、時代の流れとともに、結党時から有していた「ナショナリズム」の部分を強めた。次第に陸軍との接近をはかり、陸軍省新聞班作成のパンフレット『国防の本義と其強化の提唱』(1934年10月)を支持した。こうした現実路線も功を奏し、二・二六事件直前に実施された第19回総選挙では18議席を獲得して躍進した。丸山が「政治学に於ける国家の概念」を提出したのはそれから約半年後のことである。

この論考とは別に、1936年(末頃か)に丸山が書いた原稿「現状(status quo)維持と「現状打破」」(以下、「現状」原稿)が存在する。²⁵⁾「政治学に於ける国家の概念」よりも時代状況を意識してノートに記された同論は、AとBの問答形式で進む会話内で日本のファシズムを論じた点が着目される。

「現状」原稿は、その内容から「政治学に於ける国家の概念」をふまえて書かれていたことが読み取れる。ヒルファーディング『金融資本論』が参照され、「ファシズム体制への移行といふ世界的現象の線」が説明された。他方で「政治学に於ける国家の概念」と異なる点は、反ファシズム統一戦線的な可能性が検討されたことである。二・二六事件後にファシズムがより切迫した問題としてとらえられただけでなく、1935年のコミンテルン第7回大会で打ち出された反ファシズム人民戦線戦術や、日本自生の反ファシズム統一戦線が意識されていた可能性もある。1935年から36年にかけて雑誌『世界文化』の刊行(「世界文化情報」欄でフランス・スペインの反ファシズム文化運動、人民戦線内閣の紹介)や『社会評論』『改造』『中央公論』などで

の人民戦線関連特集の登場、そして反ファシズム統一戦線に積極的な加藤勘十らの労農無産団体協議会の運動と社会大衆党への呼び掛けなど、まさに反ファシズム統一戦線はこの時期の旬のテーマだった。²⁶⁾

こうして日本のファシズムの説明とそれに対抗する統一戦線の要が述べられたのが「現状」原稿だった。その内容をまとめれば、ファシズムの一般的な形態として「大資本の圧迫とプロレタリアートの勃興によつて挟撃された中間層の運動」として出発すること、それゆえに当初は「反資本的なプログラム」をかかげて広汎な大衆を吸引するが次第に資本に利用されて、「資本の最も強力な防衛形態」となる。日本で起きた五・一五事件、血盟団事件、神兵隊事件はいずれも「初期ファシズム運動」の表現であり、二・二六事件で「最高潮」に達したとされる。ここで丸山は「かうした下からのファシズムの暴力的発現は、資本を脅威しつゝも、上からのファシズムをおしつゝめる契機となつたのだ」と述べる。今後は、「下からの合法的ファシズム——たとへば政党といふ形式での——」が成長する可能性があるとするが、それは大衆を利用する政治的手腕をもった指導者がでてくるか次第だとした。ここで、丸山が警戒するのが、「資本の自由主義脱皮のプロモーター」である軍部や新官僚といった「革新勢力」である。これら「革新勢力の非革新性」を大衆へ伝える必要があるとして、その役割を社会大衆党に期待した。

さういふ点で社会大衆党の指導幹部ともあらうものが、現状維持と現状打破といふ愚にもつかない非科学的な観念に捉はれて、「革新勢力」と提携しようとしてゐるのは全くどうかと思ふ。いまは骨抜きになつた既成政党なんかを相手にわめてゐるときぢやない。既成政党はいま分解過程にあり、幹部派と少壮派との間には深刻な対立がある。無産政党はむしろ既成政党の自由主義的分子を糾合して、危機にある政治的自由を擁護すべきだ。総選挙景気に有頂天になつてゐるけれども、上述した様な大衆的なファシヨ政党が出来れば、忽ちお株をとられちまふことは火を見るよりも明かだ。いまから、かうした現状打破派とはつきりけじめをつけるために社大党は「デモクラシー」の旗を真先にかゝげなければならない。

この論調をみるならば、「政治学に於ける国家の概念」ではなく、「現状」原稿こそが反ファシズム統一戦線論を唱えたものだろう。あわせて見るべき点は、ファシズム論に「上からの」「下からの」といった工夫が加えられている。同時代でよく見られた図式を丸山も採用していた。「合法的」ファシズムという言葉も、長谷川如是閑『日本ファシズム批判』（大畑書店、1932年）などで使われていたので、丸山も目にしていたものと思われる。

同じく社会大衆党への期待も、当時の論壇でしばしば唱えられたものだった。後年の丸山は

「もっと広い意味で、ファシズムに対抗する大同団結というのを人民戦線と言っていたんですね、僕たちは」と語る。²⁷⁾ これは必ずしもコミンテルン―日本共産党本体経由のいわば「正統」な人民戦線ではない形での「人民戦線」を視野に入れていたこと、またその「大同団結」の要になりうると考えられたのが社会大衆党だったことを表している。丸山の、「無産政党はむしろ既成政党の自由主義的分子を糾合して、危機にある政治的自由を擁護すべきだ」との一文は、「政治学に於ける国家の概念」では踏み込めていなかった、「無産者」を主な基盤とする〈社会主義〉的立場に丸山が近づいたことを物語る。しかし、現実の動きは丸山の期待通りにはならなかった。翌年の盧溝橋事件を受けて、社会大衆党は総力戦体制協力へ舵を切ったためである。

5 『現代政治の思想と行動』の日本ファシズム論

5.1 マルクス主義的方法論との格闘

総力戦体制下での丸山の研究は近世日本政治思想へ対象を移行し、日本ファシズム論が世に問われるのは敗戦後になってからである。彼の名を一躍著名にした「超国家主義の論理と心理」をはじめいくつかの論を収録したのが『現代政治の思想と行動』（未来社、上巻1956年、下巻1957年）だった。まずは同書をまとめあげるうえでの、丸山の歴史認識、方法論を確認しておく。刊行の2年後に丸山は座談会に出て、精神的なスランプを感じていること、その背景として「ぼくの世界史は、方法的にはマルクス主義との格闘の歴史だし、対象的には天皇制の精神構造との格闘の歴史だった」が風化したために、てごたえがなくなったことを告白している。²⁸⁾ すなわち、同書刊行前は「マルクス主義」との格闘の歴史内にいたこと、それらとの対抗・調整でいかなる学問的方法を提起するかを考えていたことが読み取れる。この点は近世日本政治思想史研究のなかで深められた、イデオロギーとは異なる「思惟様式」への着眼と関係する。²⁹⁾

この方法が天皇制・「ファシズム」分析とうまく結び付いたのが、同書の「1 超国家主義の論理と心理」（初出は『世界』1946年5月）だった。³⁰⁾ 同論では「思想構造乃至心理的基盤の分析」という表現が用いられた。「下部構造」に対応するイデオロギーという捉え方ではない分析を用いることで、思想の構造とその基盤（心理）に視野を広げることが可能になった。丸山が同論で描くのは、心理的基盤における公私及び公私関係の曖昧さである。彼の問題意識は、権力と倫理の相互移入をもたらす、国家における「私利私欲」の無限侵入にあった。この日本の国家価値は「国体」に基礎をもつがゆえに、「天皇との距離」による価値序列が「臣民」間の「抑圧移譲」と精神保持へとつながる。しかし他方で、天皇自身も「万世一系」の「皇統」という虚構に基づく「絶対」化という価値維持装置が不可欠となった。

同じ分析方法を「軍国支配者」に適応したのが「3 軍国支配者の精神形態」（初出は『潮流』1949年5月）である。³¹⁾ 同論では、東京裁判被告（政治家・軍人）の「弱い精神」「劣等感」を指摘し、彼らの主体的責任意識の希薄さ、既成事実への屈服と権限への逃避（無責任な「官僚精神」の発揮）が明らかにされる。「超国家主義の論理と心理」の補論的な位置付けだが、異なる点として、「抑圧委譲の原理」が軍内「無法者」の「下剋上」（三月事件、十月事件など）を生むこと（丸山は「倒錯的なデモクラシー」と表現）、ヒエラルキー最下位の民衆の不満は委譲先なしのため「外」へ向かい「排外主義」にとりこまれやすいことを指摘した。「超国家主義の論理と心理」の一国内に閉じた図式を対外的に開くとともに、五・一五事件後に見られた「民意」昂揚の体験が生かされたといえよう。

次に、この分析方法が「日本ファシズム」に応用されたのが「2 日本ファシズムの思想と運動」（1947年6月の講演が基礎、『東洋文化講座』2（1948年）収録）である。³²⁾ 同論では、ファシズム全体構造の契機となるファシズム「運動」がイデオロギー、運動形態、社会的担い手の各特質に焦点をあてて論じられた。丸山が例示するイデオロギーは家族主義、農本主義、大アジア主義だが、大アジア主義は詳述されず、主に家族主義と農本主義になる。戦前の彼のファシズム論で頻出した国家社会主義が、戦後は脇に追いやられたのは興味深い。このため、「日本ファシズム」の近代主義的かつ「左」「右」横断的な側面がやや弱く描かれることになった。

この点は、運動形態、社会的担い手の論述とも関わる。ファシズムの運動形態は大衆非組織の志士の運動だったとされ、観念・空想・無計画的側面が強調された。担い手の方では、いわゆる「擬似インテリゲンチヤ」（小工場主、町工場の親方、土建請負業者、小売商店店主など）が「小天皇の権威」をもって「大衆」の思想と人格を統制していたことが指摘される。先の「軍国支配者」論と同様に、軍内での「無法者」が志士のファシストに、軍内の下士官が「擬似インテリゲンチヤ」に比せられた。

こうした分析のメスをファシズム運動に加えることで、今度はその全体像をいかにして構成するのかという課題が生じる。ここで丸山が採用したのは「上から」「下から」図式の採用だった。これは戦前の丸山のファシズム論を引き継いだもので、³³⁾ 「急進ファッシュョ運動」の「けいれん的な激発」が「上からのファッシュョ化」促進の契機になったとされた。このため、「日本のファシズム」は組織的な国民的基礎をもちえず、官僚的支配様式と「えせ立憲制」による支配が起きたとする。

戦前のファシズム論にみられた「資本の自由主義脱皮のプロモーター」である軍部や新官僚といった「革新勢力」に対する問題意識を継続させながら、³⁴⁾ 敗戦後ゆえ天皇制批判がより明示的に加筆された形となった。丸山は「封建的絶対主義」の支配と資本独占化の相互補強が日本ファシズム運動を特徴づけたと考えていた。このため、「ファシズムの進行過程における」「下から」の要素の強さはその国における民主主義の強さによつて規定される、いいかえるな

らば、民主主義革命を経ているところでは、典型的なファシズム運動の下からの成長もまたありえない」と述べ、日本における「ブルジョア民主主義革命の欠如」を指摘した。

5.2 丸山「ファシズム」論の課題と射程

ここでは改めて『現代政治の思想と行動』掲載の丸山「日本ファシズム」論について検討を加えたい。まずいくつかの課題が指摘できる。同書では、学界やジャーナリズム上の「ファシズム的言論」は対象外とされた。これはおそらく原理日本社や戦時期京都学派の言説を指す可能性がある。この処置によって「日本ファシズム」の「思想構造」が不分明になったことは否めない。家族主義や農本主義を軸として「日本ファシズム」の思想を捉えることは今日では説得的とはいえない。

次に、同書で書かれていることだが、丸山は病で実証的研究から途中で離れざるをえなかったようだ。実証研究は研究対象の多様性の確保や図式・枠組みの再考につながるが、それが叶わなかったために、日本ファシズム論が類型的、概説的な内容になった。このため、「日本ファシズム」の「思想構造」と社会層の関係の実証が不十分となった。丸山は「上から」「下から」図式でやや強引にまとめようとしたが、その図式で汲み取ることでできない歴史的事実も多いはずだ。

最後は、丸山のなかで、「日本ファシズム」よりもナショナリズムの方に関心が高かったのではないかという点である。戦前の彼の論では「国家」にしばしば言及され、国家と個人の狭間にある社会の現実と格闘していた。この姿勢は戦後も継続され、同書の「5 日本におけるナショナリズム」（初出は『中央公論』1951年1月）にその痕跡が認められる。ここで興味深いのは、「日本のナショナリズムの精神構造においては国家は自我がその中に埋没しているような第一次的グループ（家族や部落）の直接的延長として表象される傾向が強く、祖国愛はすぐれて環境愛としての郷土愛として発現する」と述べていることである。³⁵⁾ この言及から、丸山はナショナリズムの「ウルトラ化」の問題としてファシズムをとらえていたことが明らかになる。

では、こうした「ウルトラ化」したナショナリズムとの格闘から、丸山はいかにして、「国家の神格化」を避けて「国家をも超越した絶対的価値に立ったところの否定的独立」への道筋を見いだそうとするのだろうか。「2 日本ファシズムの思想と運動」で掲げられた、西欧をモデルとする「ブルジョア民主主義革命」がその解であるかのように見える。しかし、「5 日本におけるナショナリズム」では、「やや奇矯な表現」と前置きしながら、丸山は「ナショナリズムの合理化と比例してデモクラシーの非合理化が行われねばならぬ」と述べていた。³⁶⁾ 「舶来品」のデモクラシーを玉の如く磨き続けることなく、「合理化」されたナショナリズムと結合しうる自生的なデモクラシーを願っていた。このナショナリズムは一般的それを念頭

にしているのではない。同論で「アルトラ・ナショナリズムという既知数と今後のアジア・ナショナリズムに共通する未知数との結びつき方には実に多様な可能性がある」と述べるように、不幸にもファシズム化した日本のナショナリズムを反面教師とする、東アジアにおける「若々しいエネルギーに満ち青年期の偉大な混沌を内にはらんでいる」アジア・ナショナリズムを視野に含んだものであった。³⁷⁾ 逆説的ながら、丸山は、「混沌」を抱えるナショナリズムにこそ、「国家をも超越する絶対的価値」へいたる途を見いだそうとしたのではないかということである。

改めて「2 日本ファシズムの思想と運動」を振り返れば、「日本ファシズム」のイデオロギーのひとつにあげられた農本主義に対して、丸山の評価にゆらぎを見いだすことができる。彼は、農本主義の「日本」像のなかで、「国家」ではない「郷土的」なものを見いだす。しかも、この部分を三宅雪嶺、志賀重昂らの「日本主義」と関連付けて、「反都會的、反工業的、反中央集権的傾向」という、「上からの近代化に対する反撥」をくみ取ろうとしていた。³⁸⁾ この時点では、こうした傾向は結局「ファシズム思想にも流れ込んで来ている」と丸山は述べたが、³⁹⁾ 1950年代になってより自生的な部分を評価するようになったと考えられる。

この背景には、同時代冷戦下の政治的影響や、それによる丸山のファシズム観の変化があった。同書下巻の「3 ファシズムの諸問題」（初出は『思想』1952年11月）で、丸山は「ファシズム」を「二十世紀における反革命の最も尖鋭な最も戦闘的な形態」と定義し、⁴⁰⁾ とりわけ、既存の支配機構の内部からのファシズム化の例として1945年以前の日本と以後のアメリカをあげた。丸山は「アメリカがファシズムの現段階において果す主要な役割は、国際的な反革命の総本山たることにある」とファシズムに近い側に位置づけなおし、かの国が孕む問題点として、「抽象的「理論的」に言えば反革命のトータルな組織化過程は社会の強制的なセメント化によつて一切の異質分子——可能的・現実的な現体制の反対勢力——が一掃されたときに完了する」と述べた。⁴¹⁾ アメリカでも日本でも、思想検閲というべき「赤狩り」が暴威をふるった時期だった。

さらに、丸山は、都留重人・辻清明との座談会で、「民主主義」が自己を積極的に実現して行くという方向でなく、「民主主義」の名において「民主主義」の敵を排除するということが第一の主要な課題になつて行く。」「今後のファシズムは、嘗てのように非合理的なりに統一されたシンボルさえなくなるから、その脆弱性を補強するものとして、直接に暴力的な要素が以前より以上に強く出て来ると思う」と発言し、まさに座談会のタイトルとなった、「民主主義の名におけるファシズム」に対する危機感をあらわにした。⁴²⁾

こうした新たな局面で著された丸山のファシズム論が、同書下巻「4 ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」（初出は1954年）だった。⁴³⁾ 冒頭で「政治過程に噴出するもろもろの非合理的要素は、これを無視したり軽蔑したりせず、いわんやこれを「合理化」することなく、

非合理性を非合理性として合理的に観察の対象とすることによつて、そのはたらきを可能な最大限にコントロールする途がひらけるのである」と述べ、これらの思想と向き合う自らを律している。このうち「ファシズム」の節では、「精神傾向と発想様式」が着目され、自国・自民族至上主義、人種など「自然的」優越者支配、理性蔑視などがあげられた。また、丸山は「ファシズム」の政治的機能の「普遍化の過程」に目をこらすべきだとして、「贖罪羊」化された異質なものの排除を通じての「強制的同質化」がテクノロジーとマスメディアの動員によって行われていることに言及する。

では、戦後の、しかも「民主主義」国家さえも含む新形態の「ファシズム」の出現に対していかに対応すべきだと丸山は考えたのだろうか。戦前の丸山は、社会大衆党に言及しながら反ファシズム統一戦線成立の可能性に期待を示していた。しかし、敗戦後の彼はまた違った姿勢を見せる。同論の「反ファシズム闘争」という項目でこの点を論じる丸山は、コミンテルンの「反ファシズム統一戦線」に言及するも、その限界を指摘したからである。ここで丸山が提示する、「ファシズム」に抵抗するための「統一行動」の方法とは以下のようなものであった。

……ファシズムの本質的機能がつねに上述のような反革命と戦争のための強制的セメント化にある以上、これに対する有効な抵抗は単に政党や労働組合のような公式集団間の連けいだけでなく、その基盤として、民衆のあいだに自発的な——かならずしも直接に政治的でない——小集団が多様に形成され、相互間の自主的なコミュニケーションが活潑におこなわれることが不可欠の条件であり、したがって思想・言論・集会・結社の自由の擁護はいついかなる場合でも統一行動の最低にして同時に最高の綱領でなければならない。

この「最高の綱領」を愚直に掲げながら、国境とイデオロギーの境をくぐって蠢く「ファシズム」とその萌芽を、政治的領域の内外から「合理的」に観察し、民衆の日常から自生するエネルギーを他者の尊厳、抑圧からの生の解放と自由の獲得へと誘うこと。これが、「日本ファシズム」の体験と自ら向き合うなかで紡ぎ出した丸山の、「国家をも超越した絶対的価値」に対する答えであり、現代の「ファシズム」に向き合う方法であったと考えられる。

お わ り に

敗戦後の丸山眞男が発した著名な言葉に、「大日本帝国の「实在」よりも戦後民主主義の「虚妄」の方に賭ける」がある。⁴⁴⁾「戦後民主主義」に対する丸山の想いが伝わる一文である。では、「戦後民主主義」が登場する前の丸山は何に賭けていたのだろうか。先の一文を戦前版に置き換えれば、丸山は「国家社会主義」や、「弁証法的な全体主義」、そして社会大衆党を軸

とした反ファシズム統一戦線の可能性に賭けようとしたのではないか。

気になるのは、丸山はこれらの思想・運動に賭けることで、「大日本帝国の「実在」」といかに向き合ったのかという点である。「国家社会主義」への仮託でいえば、大日本帝国の「ファシズム」化に棹さす部分があったことは否定できない。敗戦後の丸山自身が、赤松ら国家社会主義運動を合法無産政党内の「極端なファッショ化」として位置づけているからである。⁴⁵⁾ しかし、戦前の丸山は赤松らの国家社会主義運動が「ファシズム」と形容されていたことを知ったうえで、その「良心」に期待していた時期があった。

丸山青年にとって幸運だったのは、赤松らの運動が多数の民衆の支持を得ることなく潰え、その思想・運動上の限界をいち早く悟ったことだろう。そして、思わぬ「留置場体験」を通して国家権力の暗部をのぞき見たことにより、反ファシズムへの志向や、国家から「否定的」に独立する自己を求めて、三木清に依拠した「弁証法的な全体主義」や、社大党を軸とした反ファシズム統一戦線の模索を試みた。こうした「ファシズム」抵抗に向けた思想的展開は、その後の丸山の学問・思想形成に少なからぬ影響を与えたことが考えられる。戦後の丸山の「日本ファシズム」論は、大日本帝国の「実在」だけでなく、そのなかで複雑な生を強いられた自らの過去に向き合うことから出発したのである。

それゆえに、彼が戦後に展開した日本ファシズム論、民主主義論に複雑な側面が付与されることになったのではないかと考える。本論は、その複雑な部分に、彼が自問した「国家をも超越した絶対的価値」を見いだそうとした旅でもあった。改めて丸山の思想的営為を振り返るならば、敗戦前の「日本ファシズム」に対して、敗戦後に「民主主義革命」の旗をただ掲げるのではなく、アジアや過去の日本におけるナショナリズムの勃興と、民主主義の顔をした新たな「ファシズム」の出現を各々踏まえながら、戦前日本の「人民戦線」不成立の蹉跌をふまえ、自由に基づく「最高綱領」にもとづいて「民衆」の自主的・自発的な統一行動をうながそうとしたものであった。

注

- 1) 評伝では黒川みどり『評伝丸山眞男 その思想と生涯』有志舎、2024年。荻部直『丸山眞男 リベラリストの肖像』岩波新書、2006年、など。高等学校・東京帝国大学時代については今井弘道『三木清と丸山眞男の間』（風行社、2006年）、同『丸山眞男研究序説 「弁証法的な全体主義」から「八・一五革命説」へ』（風行社、2004年）、笹倉秀夫『丸山眞男の思想世界』（みすず書房、2005年）、竹内洋『丸山眞男の時代 大学・知識人・ジャーナリズム』（中公新書、2005年）など。
- 2) 丸山眞男「1930年代、法学部学生時代の学問的雰囲気」268頁、丸山眞男手帖の会編『丸山眞男話文集』続1、みすず書房、2014年。

- 3) 同上。
- 4) 国家社会主義の歴史は拙稿「国家社会主義——「現代」を規定する思想」(長妻三佐雄。植村和秀・昆野伸幸・望月詩史編著『ハンドブック近代日本政治思想史 幕末から昭和まで』(ミネルヴァ書房, 2021 年) 参照。
- 5) 拙稿『戦間期日本の社会思想 「超国家」へのフロンティア』人文書院, 2010 年。
- 6) 丸山眞男述, 松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』岩波書店, 2006 年, 58 頁。
- 7) 丸山眞男「一九三三年の所感五点」東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集別集』第 1 巻, 岩波書店, 2014 年。以下明記しない限り同論から引用。
- 8) 赤松克麿『新国民運動の基調』万里閣, 1932 年, 49 頁。
- 9) 丸山眞男「一高時代 1933 年の手記 1 月下旬」(丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ 資料番号 517-1)。以下明記しない限り同論から引用。
- 10) 前掲『丸山眞男回顧談』上, 65 頁。
- 11) 丸山眞男「生きてきた道——『戦中と戦後の間』の予備的な試み 一九六五年一〇月」4 頁, 前掲『丸山眞男話文集』続 1。
- 12) 前掲「一九三三年の所感五点」10 頁。同論は 4 点目の原稿である。以下明記しない限り同論から引用。
- 13) 丸山眞男「昭和天皇をめぐるきれぎれの回想」21-22 頁, 同『丸山眞男集』第 15 巻, 岩波書店, 1996 年。
- 14) 『ドストエフスキ全集』第 12 巻 カラマゾフ家の兄弟, ドストエフスキー全集刊行会, 1926 年, 1300 頁。
- 15) 前掲『丸山眞男回顧談』上, 172 頁。
- 16) 丸山眞男「政治学に於ける国家の概念」同『丸山眞男集』第 1 巻, 岩波書店, 1996 年。以下明記しない限り同論から引用。
- 17) 前掲「生きてきた道」16 頁。
- 18) 「むすび」部分は草稿段階との異同が大きい。前者では「我々の求めるものは個人か国家かの entweder-oder の上に立つ個人主義的 (及その発展としての「全体主義」的) 国家論でもなければ, 個人が中間勢力としての等族のなかに埋没してしまふ中世主義的国家論でもない。真の国家論は個人と国家との間の弁証法的な相互関係の上に立てられねばならぬ。そこでは個人はあくまで否定的独立を保持しながら, しかも国家を媒介としてのみ具体的定立をうるのである。しかし市民社会の上に立つ国家構造からはかゝる関係は生じえない。弁証法的な全体主義を今日の全体主義から区別することが要請される所以である。」であった (「政治学における国家の概念」草稿) 丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ 資料番号 352-1)。
- 19) 前掲「生きてきた道」23 頁。
- 20) 三木清「有機体説と弁証法」325 頁, 同『三木清全集』岩波書店, 1966 年。同論は『新興科学の旗のもとに』第 1 巻第 3 号 (1928 年 12 月) 掲載。
- 21) 笹倉秀夫「丸山眞男インタビュー全 3 回の記録 (1984・1985 年)」『早稲田法学』95 巻 4 号, 2020 年 7 月。引用部分は第 3 回 (1985 年 6 月) のインタビュー時である。
- 22) 三木清「全体主義批判」神戸商大新聞部編『経済科学 四十四権威集 附・世界の学者を語る』甲文堂書店, 1935 年。
- 23) 前掲『丸山眞男回顧談』上, 173 頁。
- 24) 社会大衆党については拙稿「社会大衆党結党過程の検討」法政大学大原社会問題研究所・榎一

江編著『無産政党的命運 日本の社会民主主義』（法政大学出版局，2024年）参照。

- 25) 丸山眞男「現状（status quo）維持と「現状打破」」丸山眞男手帖の会編『丸山眞男話文集』1，みすず書房，2008年。以下明記しない限り同論から引用。
- 26) この時期の「人民戦線」的な運動については拙稿「反ファシズム人民戦線論」（山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義』戦前昭和篇，筑摩新書，2022年）参照。丸山が高等学校時代からロマン・ロランを愛読していたことも人民戦線との関係を考えるうえで参考になる（丸山眞男「ロマン・ロランと私の出会い」同『丸山眞男集』第9巻，岩波書店，1996年）。
- 27) 前掲「生きてきた道」45頁。
- 28) 「戦争と同時代 戦後精神に課せられたもの」234頁『丸山眞男座談』2，岩波書店，1998年。初出は1958年。
- 29) 安丸良夫「丸山思想史と思维様式論」『日本思想史学』32号，2000年。
- 30) 「1 超国家主義の論理と心理」丸山眞男『現代政治の思想と行動』上巻（未来社，1956年）。以下，明記しない限り同論より引用。
- 31) 「3 軍国支配者の精神形態」前掲『現代政治の思想と行動』上巻。以下，明記しない限り同論より引用。
- 32) 「2 日本ファシズムの思想と運動」前掲『現代政治の思想と行動』上巻。以下，明記しない限り同論より引用。
- 33) 前掲「現状（status quo）維持と「現状打破」」。
- 34) 同前。
- 35) 「5 日本におけるナショナリズム」158頁，前掲『現代政治の思想と行動』上巻。
- 36) 同前，165頁。
- 37) 同前，151頁。
- 38) 前掲「2 日本ファシズムの思想と運動」42，43頁。
- 39) 同前，43頁。
- 40) 「3 ファシズムの諸問題」272頁，丸山眞男『現代政治の思想と行動』下巻，未来社，1957年。
- 41) 同前，290頁。
- 42) 都留重人・辻清明・丸山眞男「民主主義の名におけるファシズム 危機の政治学」『世界』94号，1953年10月。
- 43) 「4 ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」前掲『現代政治の思想と行動』下巻。以下，明記しない限り同論より引用。
- 44) 丸山眞男『現代政治の思想と行動』新装版，未来社，2006年，585頁。
- 45) 前掲「3 日本ファシズムの思想と運動」33頁。

要 旨

本論は、丸山眞男における日本ファシズム論の形成を、彼自身の戦前期の時代体験と思想的模索に即して再検討することを目的とした。従来の丸山研究では、「超国家主義の論理と心理」をはじめとする戦後の代表的論考に焦点が当てられ、学問的形成史が主に論じられてきた。その結果、丸山が戦前の「ファシズム」状況をいかに体験し、いかなる選択や逡巡を経て戦後の理論へと至ったのかという点は、十分に掘り下げられてこなかった。本論は、この欠落を補うべく、丸山眞男文庫の新資料を活用し、彼の思想と時代状況との交錯を具体的に跡づける。戦前の丸山は、「国家社会主義」や三木清の唱えた「弁証法的全体主義」、さらには社会大衆党を軸とする反ファシズム統一戦線に一定の可能性を見いだしていた。これは、後年の「戦後民主主義」への賭けに先立つ、現実政治への切実な関与の表れであった。しかし、国家社会主義運動には結果的に「ファッショ」化の傾向が内在しており、丸山自身もその限界を認識するに至る。赤松らの運動が大衆的支持を得られずに挫折したこと、さらに留置場体験を通して国家権力の抑圧的側面を直接知ったことは、彼の反ファシズム的な志向を決定的なものとした。こうした戦前期の思想的遍歴は、戦後の日本ファシズム論の重要な前提を成している。丸山の理論は、単なる体制分析にとどまらず、大日本帝国の内部で生きた自己の過去と向き合う自己反省的契機を内包していた。そのため彼の民主主義論は、民主主義の名を借りて出現しうる新たなファシズムへの警戒や、アジアと日本におけるナショナリズムの歴史的経験への配慮を含む複雑な構造を有していた。本論は、丸山が国家を超えた価値を模索しつつ、自由に基づく民衆の自発的統一行動を構想した思想的営為の全体像を明らかにした。

キーワード：丸山眞男、ファシズム、国家社会主義、戦後民主主義、超国家

Abstract

This paper reconsiders the formation of Maruyama Masao's theory of Japanese fascism by situating it within his prewar experiences and intellectual engagements. While existing studies have focused largely on his postwar writings and academic trajectory, they have paid insufficient attention to how Maruyama personally confronted the prewar fascist order and how his uncertainties and political choices shaped his later theories. Drawing on newly available materials from the Maruyama Masao Library, this study reconstructs the concrete interaction between his thought and the historical conditions of the 1930s. It shows that Maruyama initially explored possibilities in national socialism, Miki Kiyoshi's "dialectical totalitarianism," and the anti-fascist united front centered on the Social Mass Party, reflecting a serious engagement with practical politics prior to his commitment to postwar democracy. However, the inherent tendency of these movements toward fascistization, their failure to gain mass support, and Maruyama's own experience of state repression through detention solidified his anti-fascist orientation. This prewar intellectual trajectory constituted a decisive foundation for his postwar theory of Japanese fascism, which combined systemic analysis with critical self-reflection on his own historical position. Consequently, Maruyama's democratic theory embodied a complex vigilance against new forms of fascism within democracy itself and a sustained awareness of nationalism's historical legacy in Japan and Asia.

Keywords : Maruyama Masao, Fascism, State-socialism, Postwar Democracy, Beyond the nation